

2025.02.05.

T.Kobayashi

日記に書かれた俳句・短歌・川柳

稀に五七五や五七五七七が頭に浮かぶことがある。深く考えてひねり出した作ではないが、その日の日記にメモして置くことにした。逸作を目指して悩みに悩んで作ったわけでもないのに、メモしておくだけでも恥ずかしさがある。ある日、突然思い立って約五年分のメモを拾い出してみた。

<1> 俳句の部

右膝の人工関節手術から半年、日常生活の中にリハビリを織り込んで動き始めた新年。

通院の途中で立ち寄る京成津田沼駅横の中華料理屋「タケちゃん」のタンメンが気に入った。

正月明けの通院の日に

(2019年1月8日)

この年も命ありけり初タンメン

天災地変に備えて、何とか「連続して一時間歩ける力」を取り戻したいと思うようになり、通院の帰り道で、病院の近くにある寺社を覗き歩いた。意外な発見があって面白かった。(2019年1月11日)

えりまきの風に踊るや寺の道

77才の誕生日に辿り着いた。「こんな年令になることができたのだ」という驚きが正直な印象。

「七十七」から「喜寿(よろこびの祝い)」という言葉を引き出した人は凄い。(2021年5月7日)

喜びの歳と言うらし五月雨

ベランダから見下ろす近所の家の庭木、これも秋の風情か。「か」づくして表わして見た。

(2021年10月21日)

柿カリンかすかに残る枯れ枝に

姉の80才の誕生日、ハガキにしたためて祝いとした。

(2022年2月4日)

春立つ日八十路に入りし姉祝う

石川守昭君8月27日に他界。肺癌との戦いを終えて旅立った親友の葬式の日。(2022年8月31日)

八朔に逝きし友あり空ながむ

高校時代から始まった長い交際の終りの別れもできぬままになっていた石川君の墓参りができた日。

日が傾き始めた源長寺の墓地にて浮かんだ一句。

(2022年12月9日)

香をまとい友の墓石の影長し

温かくなってくると、マスクをする人が増えるのだが、コロナ以降は常にマスクをしている人が増えたので、あまり目立たなくなった。風に乗って流れてくる、やや強めの香りはどこかの家の沈丁花。思わずくしゃみが出るような甘い香り。

(2023年3月)

くさめふたついでこにありや沈丁花

沈丁花香りただよいくさめかな

ベランダの水がめに氷が張るようになると正月が近い。今年もいよいよ冬になったんだなと、身が引き締まる感じがする。なぜか、そっと触れてみて納得する。 (2023年12月23日)

みずがめの氷に映る顔のしわ
みずがめの氷に触れて背をのばす

元朝の膳に飛びこんできたニュースに驚愕。こんな日を選んで、こんなことが起きるなんて、何たることかと天を恨んだ人は少なくなろうと想う。大変な一年が始まってしまった。(2024年1月1日)

地を揺らし初空悲し能登の町
夢燃ゆる新しき歳炎(ひ)が襲う
大地揺れ夢うつつなるお正月
元日や寿ぎの膳くつがえり

仲秋の名月、ベランダで月見としゃれてみた。はらはらしながら見上げる空に (2024年9月17日)
むらくもの去(い)にてうれしき望の月

<2> 短歌の部

毎年恒例行事にしている初日の出遙拝。氷点下7度の厳しい寒さの中で日の出を待つ緊張感は、何にも代えがたいものだった。(2021年1月1日)

あかねさす紫に染む東(ひむがし)の 小山越え来る初の日の出は

歌会始の御題「友」にちなんで、ひとつ試して見た。阪神淡路大震災で被災した神戸の河合良君を思い出して。(2023年1月18日)

厠から出られず命助かりし 友を想う日 1.17

後日譚だが、ここで辛うじて命を落とさずに済んだ彼は、のちにコロナウイルスに襲われて、他界した。

午後から夕方にかけて公園に行くと老人の何人かのグループが日向で雑談をしている。時々参加してみると面白い。ここへ来れば誰かと会える、誰かとお喋りするのが楽しみと言う。人と触れ合う、人と語り合うということが心の健康に欠かせないものだということがよくわかる。 (2023年2月1日)

和みとは集うことかとおぼえたり 午後の公園老いの語らい

ニュースで歌会始のことを報じていた。御題は「和」とのことから、先の一作に加えてもうひとつ添えてみた。(2023年12月27日)

和をもって足るを名とする我が父が われに授けし名をば想う日

長女一家・次女一家に次弟一家も加わり、愉快的新年の夕食を楽しみ始めた時、テレビに映ったニュースに驚いた。お年玉の交換や祝いの乾杯が済んだところで突然大地が波打った、被災地の人達の驚愕は想像を絶する。幸せの頂から奈落の底への転落……。 (2024年1月1日)

新年の盃かわす宵の膳 しばし沈黙地震報道
新しき歳祝わんと宵の膳 割って入りしは大地鳴動

災厄に見舞われた新年、歌会始で「来年の御題は夢」と発表された。元旦の即興二作に推敲を加えて、こんな歌にしてみた。

(2024年1月)

子ら集うあらたまの膳笑み凍り 夢かうつつか大地波打つ

<3> 川柳の部

年賀状を出さない人が増えてきたし、自分でも出す枚数が減ってきた。いつの年にも思う郵便局員の労苦が、ちょっと違う心配に変わってきた昨今。

出さぬのに来る枚数が気にかかり

能登半島で大地震発生した。福島での事件のことも少しずつ忘れられ始めて来たところへ、また大地震また原発のそばで起き

近所のKさんが川柳のサークルに入って研鑽を重ねている。時々見せてくれる作品集に、いつも敬服。

ことのはをつむげばゆるるかわやなぎ

2024年10月、郵便料金が値上げになった。目も向けられなかった1円切手や2円切手が表舞台に登場することになった。「前島密」という人のことも殆どの人が忘れてしまっただろうに。

前島がひそかに笑う神無月

近所の人々が、脳梗塞になり救急車で運ばれて行った。前の日までウォーキングしていたのに……。高齢化した団地では救急車の音がしばしば聞こえてくる。

今日はだれ明日は我が身の救急車

以上